
魔法先生ネギま！ 魔術師殺しに連なる者

終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ 魔術師殺しに連なる者

【Nコード】

N1265U

【作者名】

柊

【あらすじ】

少年が行く世界はネギまの世界。

少年が神より貰った力は魔術師殺しの力。

そして少年は魔術師殺しの力でネギまの世界を駆け抜ける。

この小説は作者が、魔術師殺しの力をメインで使う小説がないと思つて書いた小説です。

なので、更新速度は遅くなると思います。

プロローグ（前書き）

ISの方が現在書けないので、新しい小説を投稿します。

プロローグ

「……は？」

少年が目覚めたのは、ただただ真っ白なだけの世界だった。

「やっと起きましたか」

「あなたは？」

「うん。厳密には違っけど貴方達で言うところの神とでも考えてくれたら良いわ」

「……………神ですか」

少年にとって神はあまり好ましい存在ではない。

「で、その神様は一体俺になんのようなのですか？」

「実はね、貴方をこちらの不手際で殺してしまったの」

「はあ？」

少年にとってその話はとても許容できるものでは無かった。少年が乗っていた車には、自分の妹もいたのだから。

「不手際で殺した？まあ、それはいい。それより妹はどうなった？」

「妹さんも死んでしまったわ」

「嘘だろ……」

少年にとって妹は唯一の肉親だった。

親を幼い頃に無くし、親戚に引き取られた二人は、今まで一緒だったのだ。

そして、唯一の肉親の妹も少年と一緒に死んでしまった。

妹を守る になると誓った少年にとって、妹の死はある意

味、少年自身が死んだよりもきついものであった。

「それでね、君には転生して貰うことになってるの」

「転生？」

「そう。私達の不手際で死んでしまった人達は転生させることになっているの。」

貴方の妹さんも多分、別の神によって転生させられているわ。」

「どこの世界に行くんだ？」

「貴方は一応ネギまの世界よ。それより貴方、欲しい能力ある？ 転生する人には能力が与えられるの」

その言葉を聞き、少年は考える。

少年は を目指していた。

だから、少年は夢に破れ、ただ戦うだけの道具となった男の力を貰うことにした。

「じゃあ、一つ目、衛宮切嗣の使っていた武器、魔術、そして彼の戦闘技術を使えるように。」

二つ目 Fate に出て来る魔術、魔法の知識を。

三つ目 英霊エミヤの視力と千里眼を。

四つ目 身体を固有時制御20倍速まで耐えられ、不老の体に。

五つ目 アヴァロン（全て遠き理想郷）をくれ。ただし俺自身の魔力で使用出来るようにしてくれ。

後、ネギまの世界での魔力はネギの二分の一で魔術回路は遠坂と同じ数でお願いします」

「また随分とマイナーな能力にしたわね。普通なら無限の剣製とか王の財宝とかもらう人が多いのに」

少年は苦笑しながら、

「まあ、士郎やギルガメッシュが嫌いな訳では無いんだけど、切嗣

さんの信念が俺、好きなんですよ」

神はふーんと言いながら、

「まあ、良いわ。じゃあ、二度目の人生楽しんできてね。遠野司君」

そして、少年、遠野司の物語が始まる。

プロローグ（後書き）

新しくネギまの小説を投稿します。

この小説は魔術師殺しの力を持った転生オリ主系小説が無かったので、書いてみました。

今、ISを友人に貸してしまい書け無いたのでISを返して貰うまではこちらがメインになります。

魔法先生ネギま！魔術師殺しに連なる者をよろしくお願いします。

第一話 テオドラとの邂逅

「ハア……ハア……」

褐色肌の少女は何かから必死に逃げている。

その少女はヘラス帝国第三皇女テオドラである。

テオドラは第三皇女であり、本来は城にいたのだが、城の空気に嫌気がさして抜け出し、森を一人で歩いているのをドラゴンに見つかったのだ。

「なぜじゃ、なぜこんなことに。死にたくない妾はまだ死にたくない」

テオドラは後悔をしていた。

城はあまり楽しくは無かったが、まったく楽しくなかったという訳でも無い。

もし、城から抜け出していなければ。

テオドラは何回思っただろう。

そして、ドラゴンからの逃走もついに終わる。テオドラは木に躓いて転んでしまったのだ。

「死にたくない、死にたくない。誰か、誰か妾を助けるのじゃ！」

その言葉と共にドラゴンがテオドラに向かって突進してくる。テオドラは死を覚悟し、ギョツと目を閉じてその時を待った。しかし、その瞬間テオドラは誰かに抱き抱えられ、ドラゴンの突進は空振りに終わる。

テオドラは、状況を掴めなかったが、自分が助かったことは分かり閉じていた目をあける。

目の前にいたのは、黒髪で古びたコートを着ている少年がいた。

「ここは……森？」

そう言った少年は遠野司。神と呼ばれる存在に殺され、ネギまの世界に転生することになった少年だ。

9

「ここがネギまの世界？というより、持ち物が何もなし!? 転生の際に貰った武器は何処だ！」

司はコートのポケットの中を探る。

すると、そこには一枚の紙が入っていた。

そしてその紙には、

「この手紙を読んでいるのであれば、無事転生に成功したようですね。とりあえず武器に関しては犯罪にならないよう異空間の武器庫に入れてあるので、使いたい時はそこから出してください。一応サ

ービスで弾は無限です。起源弾については、原作と同じ数だけ入れ
てあるので、増やしたいのであれば自分で作るように。
魔術回路については頭を拳銃で撃ち抜くイメージで使用できるはず
です。ただし、最初は十五本しか使えないから注意をしておくよう
に。じゃあ、二度目の人生を楽しんでね」

「成る程。じゃあ、コンテNDERを出してみるか」

司はそう言いながら、コンテNDERをイメージする。
すると、司の手にコンテNDERが握りこまれていた。

「これが、コンテNDER。切嗣が使っていた銃。始めて持ったのに
まるで長い間、使っていたように手になじむ」

そして、司は薬室を開放し、露出した薬莢のリムを指に引っ掻け外
へ弾き出し、返す手で薬室内に二発目の弾薬を刷り込ませ、即座に
銃身を跳ね上げ薬室閉鎖。
これらの作業にかかったのは、二秒程。始めてにしては上出来だが、
まだまだ練習の余地がある。

「今日はこのくらいで良いか。とりあえず森から抜けないと」

司は森を抜けようと走っていると、

「死にたくない、死にたくない。誰か、誰か妾を助けるのじゃ！」

と声が聞こえた。

司は声が聞こえた方に走っていくと、そこには褐色肌の少女がいた。そして、その少女を目掛けて突進をするドラゴン。

「まずい！」

司はドラゴンにやられかけている少女に向かって走っていき、その少女を抱き抱えそのまま離脱。

「君、大丈夫？」

「おぬしは？」

「俺は遠野司。それより君は？」

「妾はテオドラ。ヘラス帝国第三皇女じゃ」

「そうか、それよりも早く逃げる。ドラゴンは何とかしてやるから」

「無茶じゃ。確かにあのドラゴンはそれほど強うはないが、装備も無しに勝てる相手ではないぞ！？」

テオドラは司に向かって言う。

自分の命の恩人をみすみす死なせたくないと思い、そう警告するが、

「俺は大丈夫だから、早く逃げろ」

「じゃが……」

「安心しろ。勝算があるから」

「そ、そうか。じゃが、危なくなったら逃げるのじゃぞ」

そう言いながら、テオドラはドラゴンに背を向けて逃げていく。

「俺はまだ死ねないからな。ドラゴン、お前に負けるわけには行かないんだ」

司がドラゴンにそう言い放つと、ドラゴンは口に魔力を収束させる。

「あれはプレスか？まあ、いい。魔術回路、起動」

司は自分の頭を拳銃で撃ち抜くイメージをし、魔術回路を起動させる。

「魔術回路は十五本か。まあ、あいつ相手ならなんとかかなるか？」

その瞬間、ドラゴンの口から炎が吐き出される。その炎は高温で、人間の体を一瞬で蒸発させるだろう。

「あれは、生身じゃ避けられないな。仕方ない。固有時制御、二倍速」

その瞬間、体が大きく変化するのを感じた。

体の血液が普段の倍の速度で体を巡り、筋肉組織の始点と終点にかかる時間が短縮される。

肉体機能を加速、または停滞させる魔術。

これが固有時制御だ。

そしてそのままブレスを避ける。

ドラゴンは自分の持つ最強の一撃をよけられ、驚いている。

「隙が出来た。今の内に」

そう言って司は一つの狙撃銃を取り出した。

その狙撃銃の名前は、ワルサーWA2000セミオートマチック狙撃銃。

全長九十センチとライフルにしてはコンパクトだが、その銃身の長さは六十五センチにも及ぶ。300ウィンチエスター・マグナム弾は有効射程距離1000メートルという最高性能のライフルである。

「強化」

ライフルに強化の魔術をかける。
そしてライフルの引き金を弾く。
強化の魔術によって威力を増した銃弾はドラゴンの頭に着弾。
ドラゴンの頭はザクロのように弾ける。

「あれ？」

予想外の威力に戸惑う司。
せいぜいドラゴンの頭に傷をつければ良いと思って撃った弾丸がドラゴンの頭を吹き飛ばしたのだ。驚かない方がおかしい。

「おぬし、凄いのう」

感心したような声をあげるテオドラ。

「逃げたんじゃないのか？」

「一応、一回逃げたのじゃが、おぬしの事が気になっての？戻ってきたのじゃ」

無い胸を張りながら言うテオドラ

「何か、むかつくことを言われた気がするのじゃが……」

……意外に鋭いらしい。

「それでの、おぬし。妾の護衛にならぬか？」

「えっと、どういうことだ？」

「妾は第三皇女。だから、妾は城から外にはなかなか出られん。じやが、おぬしほどの腕前なら外に出してくれるかもしれぬし、出られなくても話し相手にはなれるじやろう？」

寂しそうな顔で話すテオドラ。

やはり、年頃の少女、普通に外で遊びたいのだろう。

「そうか、分かったよ。俺はお前の護衛、やらせてもらっよ。」

「本当か！そうと決まったのじゃ、早くいくぞ。それと妾はテオドラじゃ。テオでよいぞ」

「そうか、テオ。俺の名前は遠野司。よろしくテオ」

そうして二人は森を抜け、帝都へラスへと向かう。

第一話 テオドラとの邂逅（後書き）

このような駄文を読んで頂き本当にありがとうございます。
とりあえず主人公はテオドラに出会います。

所謂テンプレというやつです。

次話は紅き翼が出るかもしれませんが。

予定は未定ですが。

感想や意見は是非願います。

これからも魔法先生ネギま！魔術師殺しに連なるものをよろしくお願います。

第二話 崩壊の序章（前書き）

今回はかなり主人公が外道です。

第二話 崩壊の序章

司がテオドラに会い、テオドラの護衛になってから数ヶ月後、帝国と連合による戦争が始まっていた。

戦争は激しさを増し、遂に司も戦争に出ることになった。

「のう、本当に戦争に行くのか？妾が頼めば別に行かなくても良いのだぞ」

「いや、俺は行くよ、テオ。俺はこの戦争を早く終わらせたいんだ。俺はちゃんと生きて帰ってくるから」

「そうか、分かったのじゃ。じゃが、必ず生きて帰るのじゃぞ」

「分かった。ちゃんと生きて帰るよ。じゃあ、行ってくる」

司はそう行って城を出ていった。

今、司の前には連合軍の艦隊が進軍している。そしてその下にいる連合軍の兵士も、こちらに向かい進軍している。

「にしても、かなりの数の兵士が居るな。紅き翼は居ないみたいだな。この戦いで一人は戦闘不能にしたいのだが」

そう言いながら、ワルサーを構える。

「魔術回路 起動。強化！」

そして強化の魔術を銃と自分の目にかける。

「流石に艦隊は落とせないから、紅き翼が来るまでは帝国軍の手助けをしようか」

そう言った司の顔に感情が感じられない。

そして司は連合軍の兵士に向かって引き金を弾く。

「ぐあっ!?!」

銃で撃たれた兵士の断末魔の叫びを合図に戦争が始まる。

司はまるで機械のような正確な狙撃で地道に敵を削っていく。

戦況は今のところ帝国が優勢である。

だが、帝国の優勢はたったの四人によって崩される。

「契約に従い、我に従え、高殿の王。来れ、巨人を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻 『千の雷』」

いきなり放たれたそれは、帝国軍の艦隊を一瞬で消し去る。その魔法を放ったのは、十三歳ほどの赤毛の少年であった。

「あれはナギ・スプリングフィールド！ようやく来たか」

そしてその少年の周りには三人の男。

一人目は優男という印象を受ける男。名前はアルビレオ・イマ。

二人目は刀を持っていて眼鏡を掛けている、近衛詠春。

三人目は子供のように見える、ゼクト。

そして紅き翼のリーダーたるナギ・スプリングフィールド。

この四人が最近連合についた紅き翼。戦闘能力は異常の一言で、帝国の艦隊を破壊するという。さながら、人間核兵器である。

「来たのは良いが、誰を戦闘不能にするべきか」

司は四人がいる方を見る。

（ナギ・スプリングフィールド、論外。

司の切り札を使えば勝てるけれど、仲間が居る状態ではかなり危険を伴う。

アルビレオ、これも却下。

司の今の銃ではアルビレオの障壁をこの距離から貫ぬくのは不可能に近い。

ゼクトも同様の理由で却下。

詠春、気を纏っているが攻撃に気を回しているため、司の今の銃で貫くことは出来る)

「狙うのは、近衛詠春。だけどあいつは神鳴流の剣士。飛び道具はほとんど効かないらしい。一つだけ策はあるが、おそらく一度しか効かない。まったく面倒なことだ」

そう言いながら、銃を構える司。

「……………」

銃弾に何か呟く司。

そして司が持っている銃弾にはルーン文字が刻み込まれている。ルーンの効果は速度の上昇。

これによりライフルの速度が更に上昇している。

「これでよし。前例が無いから成功するか心配だったがどうやら成功したようだ。にしてもこの技術。今回みたいな場合を除いたら、ほとんど使い道ないんだろっな」

ルーンが刻み込まれている銃弾を装填。

後は引き金を弾くだけ。

「これが詠春の体に当たれば俺の勝ちだ。紅き翼……お前らを英雄にさせる訳にはいかないからな。ここで朽ちてもらおうぞ」

司は詠春に向かい、引き金を弾く。
本来なら絶対反応できないであろう一撃。
だが詠春は、その一撃に反応する。

「はあああああつ！」

声を上げながら、弾丸を切り裂きにかかる。
だが、その行動こそが司の狙いであった。

「解放！固有時制御 三重停滞」

司が叫ぶと、銃弾から淡い光が立ち銃弾の速度が三分の一となる。
司が行ったのは、遅延呪文。Fateの世界の魔術とネギまの魔法を合わせたものである。

神鳴流の使い手たる詠春にとって司が放った弾丸は決して反応できない訳ではない。

だが、逆に一度反応してしまえば、突然速度が変わった弾丸に咄嗟に反応するのは、流石の詠春でも不可能。

そのことを応用して、遅延呪文で固有時制御を弾丸内で発動。切嗣は体内でしか使えないが、切嗣より遙かに多くの魔術回路とキヤスターを越えるほどの知識によって、自身の体以外での展開に成功した。

詠春は突然速度が変化した弾丸に対応出来ず、空振りしてしまつ。
そしてそのまま弾丸は詠春の肩に吸い込まれていく。

「がああああああ！」

叫ぶ詠春を余所に司は次弾を装填する。

その弾丸には治癒阻害のルーンが刻み込まれている。

それを詠春の右肩に狙いをつけて、引き金を弾く。

痛みで我を忘れていた詠春は、弾丸に反応できるはずもなく、

「がああああああ！」

詠春の右肩が吹き飛ばす。

アルビレオが回復魔法をかけるが、詠春の肩から吹きでる血は止まらない。

これは弾丸に刻みこまれていた治癒阻害のルーン効果なのであるが、そんなことを知らない紅き翼のメンバーはパニックに陥る。

「詠春っ!?!」

仲間が詠春に構っている間に司はさらに弾丸を装填。

そして腕と共に落ちていく夕風に狙いをつけて撃つ。気による強化のない夕風は弾丸の力に耐え切れず、粉々に砕けちる。

「あ、あ、あああああああ!？」

錯乱したように叫びだす詠春。

まあ、無理もないだろう。

自分の剣の誇りを傷つけられ、剣士にとって大事な利き腕を失い、そして自分の愛刀を失ったのだ。

錯乱しない方がおかしい。

司の方にナギが飛んでいく。

仲間がここまで傷つけられたのだ。ナギは黙ってはいられないだろう。

「てめえ、詠春を不意打ちしやがって。男なら正々堂々と戦え。この卑怯者」

「卑怯か……そのなにが悪い？」

「はあ？」

「お前がいるのは戦場だ。遊びではない。卑怯なんて言葉は通用しない」

「ふざけるなよ!だからってあそこまでする必要があるのか!」

「あるだろう?相手を再起不能に出来れば、それだけ死ぬ人数が減るからな。お前が言っているのはただの綺麗事だ。これだから英雄ってやつは。俺は任務を達成したからここで逃げさせてもらう。ちなみに俺の名前は司。遠野司だ。じゃあな」

「待て！『雷の斧』」

「無詠唱で雷の斧かよ。これだからチートは厄介なんだよ。転移」

ナギの雷の斧が当たる前に司は転移札で転移する。

そこに残ったのは、今だ錯乱している詠春に掛かっている呪いを解こうとしているゼクトとアルビレオ。そして怒りで燃えているナギであった。

「ターゲットは……この男と少年」

「そしてこいつだ」

「あ？こんなガキをやるのか？」

「少年と思って油断するな。そいつは艦隊を一人で全滅させたからな」

「へえ、面白いじゃねえか」

「君が望むなら部下もつける。正規兵では無く、傭兵になってしま
うが「いらねーよ」？」

「こんなやつら俺一人で十分だぜ。任せときな」

「そうか。ならこの契約書にサインしてくれ。一応決まりでなあ」

「ああ、分かった。これでいいだろう？」

「問題ない。良い知らせを期待してるよ」

「ああ、任せとけ」

そう言いながら、出て行く男。

その男は気づかなかつた。

契約書にサインをした瞬間に相手が笑ったことを。

紅き翼の崩壊が近い。

第二話 崩壊の序章（後書き）

魔術先生ネギま！魔術師殺しを読んでいただきありがとうございます。

一体誰が予想出来たでしょうか？開始三話で詠春が退場するなんて本当はこんな内容になるはずなかったのですが、暴走してこんなこと。

もうこのまま突っ切っていきましょうか？

あとアンケートなのですが、アリカをヒロインにした方が良いでしょうか？

良いという方は1

無理という方は2でお願いします。

このような駄文を読んでいただきありがとうございます。
感想や意見待っています。

これからも魔法先生ネギま！魔術師殺しに連なる者をよろしく願います。

第三話 テオドラと街に行く。(前書き)

お気に入り登録件数百になりました。これからもよろしく願います。

第三話 テオドラと街に行く。

「テオ、帰ってきたぞ」

「司、お帰りなのじゃ」

司の帰りに満面の笑みを浮かべるテオドラ。
そんなテオドラに向かって、

「なあ、テオ。今から街に行くぞ」

「え？」

司は仮にも皇女のテオドラにそんなことを言った。

「それにしても、父上が妾を街に行かせてくれるとはもう」

「ああ、それはだな、俺が紅き翼のメンバーを一人倒して、その恩賞としてテオを街に連れていく許可をもらったんだ」

「紅き翼！？ 連合最強と言われているあの紅き翼をじゃと！？ それよりも妾のためにせっかくの恩賞を使ってよかったのか」

司はテオドラの言葉聞き、微笑みながら

「ほら、テオ、前に言ってただろう？街に遊びに行きたいって。今生活出来てるからそのお礼だ」

「司……………ありがとうなのじゃ」

テオドラは満面の笑みで言う。

今まで街にほとんど行ったことのない、テオドラにとってこれほど嬉しいことはないのだろう。

「テオ、何か食べたい物とかあるか？」

「アイスと言う物を食べたいのじゃ」

「アイスか。食べたこと無いのか？」

「そうじゃ。妾が食べるお菓子はいつでもどこかの高級なお菓子ばかりなのじゃ。だから、今日は高級ではない物を食べてみたいのじゃ」

「そうか。それじゃあ買いに行こうか」

司とテオドラはアイスを売っている店まで歩く。その店は帝国でも有名なアイスの店である。

「テオ、何か食べたいアイスあるか？」

「そうじゃのう……じゃあ、このバニラというのを食べてみたいんじゃない」

「分かった。バニラとチョコレートをください。」

司は店員にバニラとチョコレートを頼む。
しばらくすると、おいしそうなアイスを二つ持ってきた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

「ありがとつなのじゃ」

司はチョコレートのアイスを、テオドラはバニラのアイスもらい店を出る。

「本当にだれも妾に気づかなかつたのじゃ」

「俺が使った認識障害の魔術を破るのは難しいからな」

「前から思っていたのじゃが、魔術とはなんなのじゃ？」

「詳しいことは言えないが、俺が住んでた所で伝わっていた技術だ」

「そうなのか」

「ああ、それよりもテオ、アイス美味しいか？」

「おいしいのじゃー！」

「それはよかった」

テオドラと司はアイスを食べながら他愛のない話をする。話の途中、テオドラは妙に顔を赤くさせながら司に言う。

「のう、司」

「なんだ？テオ」

「そっちのチョコレートも食べてみたいのじゃ」

「ああ、構わないぞ」

そう言って司はテオドラにチョコレートのアイスを渡す。テオドラの顔はトマトのように顔を真っ赤にしている。

「どうだ。テオ、美味しいか？」

「うむ、おいしいのじゃ……………」

消え入りそうな声で言うテオドラ。

「そうか、それは良かった。次、どこか行きたいところあるか？」

「そうじゃな……………次はあそこが良いのじゃ」

テオドラと司は次の店に歩いて行った。

今現在の時間は午後2時。

昼食を食べ、二人は街を散策している。

「のう、司、本当に今日はありがとうなのじゃ」

「いきなりどうした？」

「妾は今まで、街に出たことがなかったのじゃ。いつも退屈な城に居て、これからもそうなのかと思っていたのじゃ。じゃが、司、おぬしが妾を城から連れ出してくれたのじゃ。妾は本当に感謝しているのじゃ」

テオドラは微笑みながら言う。

「それは良かった。それじゃ次はどこに行く？」

「そうじゃのう。次は……………ひゃあ！」

「大丈夫か！テオ」

テオドラがぶつかった相手はかなり柄の悪い男だった。所謂チンピラという奴である。

「おい、テメエ、なに俺にぶつかってきてるんだ」

「す、すまないのじゃ」

「テメエ、謝るだけで済むと思ってんのか、ああ！」

テオドラを威圧しているチンピラ。

「よく見ると可愛いじゃねえか。おい、お前、こっちに来て」

チンピラはテオドラに手を出そうとする。

「彼女は私の連れだ。ぶつかってしまったことは謝る。だから、許してくれないか」

「うるせえ。男は黙ってる。お前、早くこっちに来てい」

チンピラはテオドラの手を掴んだ。

「嫌なのじゃ！」

テオドラはその手を弾いた。

チンピラはテオドラのその行動にキレた。

「テムエ、俺を舐めてんのか！テムエがそんな行動とるんなら、こつちにも考えがあるぞ」

そう言っつてチンピラは杖を取り出す。

「自分の行動に後悔するんだな。

氷の精霊 5頭 集い来たりて 敵を切り裂け 魔法の射手 連弾
氷の5矢」

チンピラから放たれる五つの矢がテオドラに向かって進んで行く。そのままだとテオドラに当たるだろう。だが、テオドラと矢の間に司が立つ。

「流石に魔法を使ってきたら、ほおって置くことはできない。解析」

司はチンピラの魔法を解析する

（なんだ？これ。術式は目茶苦茶。注ぎ込む魔力も適当。こいつ、本当に魔法使いなのか？この程度の魔法に魔術を使う必要はないな）

司は矢を手で弾く。

司の手で弾かれた矢はそのまま霧散してしまう。

「なに！？」

驚いているチンピラに駆け寄り、杖を取り上げチンピラに向ける。

「形成逆転だな」

「ひいつ、すみませんでした。もうしなませんから許してください」

チンピラは先程と打って変わってよそよそしくなり、その場から逃げだす。

「行ったか。すまない、テオ、怖がらせてしまって」

「そのことについてはいいのじゃ」

「そうか。ありがとう。もう時間が無いのだが、どうする？」

「もう終わりなのか？時間が経つのは早いのが。それよりも司」

「どうした？」

「あれが欲しいのじゃ」

そう言って指を指した方に有ったのは、可愛いアクセサリーだった。それなりに高価な物だが、テオドラの持っている物と比べると安物である。

「そんなので良いのか？テオならもっと良いの持っていると思うのだが？」

「それで良いのじゃ。妾はそれが欲しい」

「そうか、分かった。このアクセサリーをください」

司は店の主人からアクセサリーを買う。

「はい。買ってきたよ」

「ありがとうなのじゃ」

テオドラは喜びながら言う。

「時間がないから城に戻るぞ」

「分かったのじゃ」

司とテオドラは城へと帰って行った。

司は城に帰った後、兵士からの報告を聞く。

「成る程、紅き翼は辺境の地にいるのか」

「はい。我々の調査ではそうなっております」

「そうか、報告ありがとう。もう帰っていいぞ」

「はあっ!」

兵士は部屋から出て行く。

「紅き翼。次がお前達の最後だ。覚悟しておけ」

司はそう呟く。

そして司は部屋を出て、紅き翼がいる地へと向かう。

第三話 テオドラと街に行く。(後書き)

この小説を読んで頂きありがとうございます。
今回はテオドラと街に行く話です。

テオドラがヒロインしてます。

次回は紅き翼を壊滅させるかもしれません。

壊滅した場合、その後の展開をどうしようかなあと考えていたりします。

アンケートは明日の午後6時までとさせて頂きます。

これからも魔法先生ネギま！魔術師殺しに連なる者をよろしく願います。

第四話 紅き翼の終焉 前編（前書き）

主人公マジ外道です。

第四話 紅き翼の終焉 前編

ナギ・スプリングフィールドと紅き翼のメンバーは詠春が離脱してしまい、任務を達成出来なかったため辺境の地へと飛ばされていた。

「詠春……」

「ナギ大丈夫ですか？」

アルビレオがナギに声をかけている。

「大丈夫な訳ないだろう。詠春があんな卑怯者にやられたんだ。俺はあいつが許せない。だけど、あの時あいつを逃がしてしまった自分も許せないんだ」

悔しさを滲ませた顔で言うナギ。

そんなナギの様子を見て、どうしようか悩んでいるアルビレオとゼクト。

「一体どうしたら良いのでしょうか？」

「ワシにも分からん。あんな馬鹿弟子を見たのは始めてじゃ」

「せめて何か、ナギとまともに戦える人でもいたら別なのかもしれないが」

「じゃが、そのような奴そうそうおらんぞ」

「ナギが復活するのを待つしかないみたいですね」

そう言いながら肉を焼くゼクトとアルビレオ。

「ナギ。肉が焼けましたよ」

アルビレオがナギを呼ぶ。

だが、ナギはこちらにこない。

「今、食欲ないんだ」

いつもならば、真っ先に駆け付けけるナギが食べないと言ったことに戸惑いを隠せない二人。

「これは重傷ですね」

「本当に馬鹿弟子と対抗できる奴を捜すべきかのう」

そんなことを言っている二人に、

「食事中失礼！ッ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！いいつちよやるつぜー！」

そんな声が崖の上から聞こえる。

「なんじゃ、あのバカは？」

「帝国の人間なんでしょうか？」

困惑する二人。

「どーした！来ねーのか？来ねーならこっちから行ってやるぜ！」

そう言ってジャック・ラカンはナギの前に飛び降りる。

「お前かナギ・スプリングフィールドか。確か弱点無しで特徴、無敵の。俺と勝負しろ！」

普段のナギであれば、勝負を受けていたであろう。だが、

「いや、今戦う気分じゃねえから俺は戦わねえ」

ナギはジャックの誘いを断る。
これにジャックは驚く。

「何だ。戦わねえのか」

「ああ、戦うない」

「成る程。ナギ・スプリングフィールドは臆病なんだな」

「なんだと！」

ナギを挑発するラカン。

「だから、自分が負けるのが怖いから戦わない臆病者なんだろ」

「てめえ、言ったな。良いぜ、相手をしてやる」

簡単に挑発に乗るナギに飽きれ果てる二人。
だが、その顔には少し喜びの表情が混ざっていた。

「やっと馬鹿弟子も本調子じゃのう」

「ええ、ナギが元気になって良かったです」

ナギの復活を喜ぶ二人。

だが、彼らは気づかなかった。

自分達を監視している存在に、

紅き翼が居る所より少し離れた所に司がいた。

(ラカンがようやく接触したようだな。後はあいつらが気を抜くのを待つだけ)

司はアルビレオとゼクトが気を抜く瞬間を狙っていた。彼ら二人が気を抜き、障壁を解いた瞬間、彼らの命は尽きる。

(にしても、ああいう甘い考えを持っている奴らほど扱い易いのはいないな。英雄なんて幻想に仕立て上げられるなんてことに気づかず、良くやってられるな)

司はおもむろに杖を取り出す。

「プラクテ・ピギ・ナル 戦いの歌」

司は自身の体に身体能力強化の魔法をかける。司はネギまの世界の魔力も持っているため魔法を使うことはできる。

(準備は整った。後は待つだけ)

そして次の瞬間、彼らの体に纏われていた障壁が消える。

「今だ！固有時制御 五倍速！」

司は紅き翼を目掛けて疾駆する。司の走る速度は人間のレベルを大幅に超えている。

司は数秒でアルビレオとゼクトの間に駆け寄る。

「お二人さん。戦いの場で気を抜いたら死ぬよ」

「な、なに!？」

「しまっ!？」

二人は司の存在に気付いたがもう遅い。

司はゼクトの方は頭に、アルビレオは左胸に銃口を当てる
そしてそのまま躊躇無く、引き金を弾く。

「アル！？お師匠！？」

ゼクトは顎から上が無くなり、アルビレオは左胸にぽっかりと大きな穴が空いていて、二人はそのまま即死したようだ。

「てめえはあの時！」

「また会ったな。ナギ・スプリングフィールド」

ナギの顔は怒りで染まり、ラカンは驚愕といった表情をしている。

「お、お前はあの時、俺に契約を持ち掛けた……………」

「ああ、そうだ。そしてご苦労だったな。罠になってくれて」

「なあっ！？」

ラカンの顔に怒りの表情が表れる。

自分の力に絶対の自信を持っているラカンにとって、これほどまでに屈辱的な事はない。

「てめえ。ふざけやがって」

ラカンが司に殴りかかる。
だが、

「ジャック・ラカン。ペナルティーだ」

ラカンの拳は司に届かなかった。
否、司の体の目の前で拳が止まったのだ。

「なんで体が動かねえ？」

ラカンの問いに答えるように契約書を取り出す。

「それは俺が書いた契約書？」

「ああ、そうだ。これの正式名称を教えてやる。これは自己強制証文と言う物だ」

「自己強制証文？」

「こいつの効果はな、契約した相手に強制の呪いをかけ、どんな手段を用いても解除不可能の契約。こいつに契約すると、契約内容は死後の魂ですら束縛する代物だ。
契約内容は、俺に対していかなる手段を持ってしても傷つけること

はできないというものだ」

ナギとラカンが顔を合わせる。

外道であると思っていたが、流石にここまでするとは予想していなかったらしい。

「お前は何処まで外道なんだ」

「外道？確かにそうかもしれないが、俺は勝つためには手段を選ばない。勝てないならば、勝つ方法を探しそれを実行するだけだ」

ナギの言葉に対して無表情で答える司。

「紅き翼もお前で最後だ。お前のその翼、撃ち落としてやるっ」

「上等じゃねえか！やれるもんならやってみやがれ。俺はお前を倒す。詠春やお師匠、アルのためにも」

サウンドマスターと魔術師殺しの戦いが始まる。

第四話 紅き翼の終焉 前編（後書き）

魔法先生ネギま！魔術師殺しに連なる者を読んでいただきありがとうございます。今回は、アルとゼクトがあっさりとして死んでしまいました。

少しご都合主義ですが、スルーしてください。次回はナギとの戦いになります。

感想、本当にありがとうございます。

返信は明日になりますが、感想の方よろしく願います。

これからもこの小説をよろしく願います。

第五話 紅き翼の終焉 後編(前書き)

今回の話は過去最低の出来です。それでも良いという方は見てください。

第五話 紅き翼の終焉 後編

「行くぜ！『魔法の射手』」

ナギが無詠唱で魔法の射手を放つ。その数、実に百。そして百の矢が司に襲い掛かる。

「まったく面倒だ。とりあえずこれでも喰らえ」

司は魔法の射手に向かいキャレコM950短機関銃を撃つ。ヘリカル式の特種な弾倉に9mm軍用弾を装填し、毎分七百発の発射速度を誇る銃だ。それにより、魔法の射手を撃ち落とす
「ちっ！なら、これはどうだ！」

ナギは杖をこちらに向ける。

「来れ雷精 風の精 雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐 雷の暴風」

ナギの杖から放たれる強力な旋風と稲妻。普通ならまず避けられないであろう一撃

だが、司はその一撃を、

「固有時制御 五倍速」

避けた。

司は固有時制御を使い、一瞬でその場を離脱。雷の暴風を避ける。

「何っ!？」

ナギは自分の攻撃が避けられ、驚く。

流石に雷の暴風を避けられるとは思っていなかったのだろう。

「この程度か？」

司はナギを挑発する。

司が考えている作戦を成功させるには、ナギを怒らす必要がある。

先程からの上から目線もナギを怒らせるための布石だ。

「うるせえ！俺はお前にだけは負けねえ！」

「本気で言ってるのか？あんちよこ見ないと魔法が使えないくせに」

司は更に挑発する。

ナギの堪忍袋の尾がもうすぐ切れそうだ。

「そんなことどうでもいいだろ！てめえ、人が気にしていることをぐちぐち言いやがって。これでも喰らえ」

ナギの杖に魔力が集まる。

「来れ 虚空の雷 薙ぎ払え 雷の斧」

ナギの杖から放たれる雷の斧。

「この程度か。固有時制御 3倍速」

雷の斧を紙一重で避ける。

「ちくしょう。さっきから逃げてばかりで正々堂々戦え！この卑怯なもの！」

ナギは叫ぶように司に言う

司は訳が分からないと言った感じでナギに言う。

「卑怯者？戦場で卑怯も糞もあるか。お前らみたいな名誉や栄光を
求める殺人者がそんなこと言えるのか？」

「俺は名誉や栄光なんて求めてない！」

「本当にそうか？お前は考えたことないのか？敵艦を落として『や
った！』と思っただけか？」

無表情でナギに言い放つ司。

「そ、それは……………」

「所詮お前ら英雄はそんな物だ。人を何百、何千も殺し、戦いの手
段に正邪を説き、戦いを楽しむ。お前ら英雄という幻想のおかげ
で若者たちがどれだけ死んで行ったと思う」

「俺は英雄なんかじゃない。ただ俺は戦争を終わらせたいだけだ。
それにお前みたいな輩が増えたら、戦争のたびに地獄になる！」

司の言葉に反論するナギ。
だが、司は鼻を鳴らす。

「お前は戦争が地獄よりマシなものだと思っているのか？戦争なん
てものはいつだって地獄だ。戦争にあるのは掛け値なしの絶望しか
ない。敗者の痛みの上にしか成り立たない。闘争を悔やみ、最悪の

禁忌としない限り、地上に何度でも地獄が蘇る」

司の言葉に反論することが出来ない。

「人間はいくら死体を積み上げてても気付かない。いつもお前ら英雄の武勇譚で人々の目を眩ませて来たからな。血を流すことの邪悪さを認めず、余計な意地を張るせいで、人間は変わることができないんだ」

ナギに対してそう言う司。

ナギはそれでも司に反論する。

「ふざけるな！お前が言っていることは正しいかもしれない。だが、それでもアルやお師匠を殺したことに変わりない。だから、俺はお前を倒す」

司はその言葉を冷淡に答える。

「そうか、それがお前の答えたか。では、命をかける。あるいは、この身に届くかもしれない」

「そこまで言うなら見せてやる。俺の全力を。契約に従い 我に従え 高殿の王 巨人を滅ぼす焼き立つ雷霆 百重千重と 重なりて 走れよ稲妻 千の雷」

ナギの杖から放たれた千の雷。その一撃は前に見たそれと比べほどにならない程の一撃。

雷に掠りでもしたら、消し去ってしまうだろう。

その一撃を前に司がした行動は、コンテンドーを構えるだけだった。普通の人が見たら、狂ったとしか思えないだろう。しかし司の顔に狂った様子はなく平然としている。

そして千の雷に向かって引き金を弾く。そしてその銃弾が千の雷に当たった時、ナギ・スプリングフィールドの命運は尽きたのだ。

もし、この場に精霊を見ることが出来たら、あまりにも常識を覆す光景に驚いただろう。

ナギ・スプリングフィールドの放った千の雷に、コンテンドーより放たれた銃弾が当たった瞬間、千の雷を形作っていた精霊が切断されたのだ。そして切断された精霊は全く別の何かへと変化し、結合した。それにより千の雷が霧散する。そして、術者であるナギ・スプリングフィールドにも変化が有った。

「がああああああ!？」

ナギ・スプリングフィールドは自分の身に何が起こったか理解できていないに違いない。

ナギの体の心肺機能と神経網はスタスタに引き裂かれている。

司が使った弾丸は起源弾。

司の起源は切断と結合。

この銃弾で撃たれた者は司の起源が具現化する。生物の体に命中すれば、その部位は壊死した古傷のようになる。表層的な部分では治つといるように見えても、もとの機能を失ってしまっている。そしてこの銃弾に魔法で干渉した場合、その起源は術者の魔力炉にフィードバックする。

魔法使いの魔力炉を電流の回線に喩えるならば、司の銃弾は一滴の水である。

電導性の液体が電気回路に付着すれば、回線短絡による電流は回路そのものを破壊する。

それと同様に魔力炉をショートさせるのだ。

司の銃が役目を終えた所で、司はトリガーガードのスプールに指をかけ、長く重い銃身を血振りするように振り下ろす。

その瞬間、薬室から空の薬莢が虚空へと弾き出される。

起源弾の殺傷能力はどれだけ多くの魔力を使っていたかによる。

この点に置いてナギは致命的ミスを犯している。挑発に挑発を重ねて本気を出させたことで、司は最大の結果を得たのだ。

ナギにはもう、魔法使いとしての力はおろか、常人並みの機能すら残されていないだろう。

司はキャレコを単射に切り替えて、ナギに近づいて行く。だが、

「させるか！」

先程まで静観していたラカンがナギを抱える。

「何のつもりだ？」

「てめえに利用されたのが悔しかったからな。てめえに一泡吹かせ
るためにこいつらに味方する」

そのままラカンがナギを抱えて逃げ出す。

「まあいいか。あいつは既に魔法が使えない。どちらにしる任務達
成か」

そう言つて司は帝国へと戻つていく。

紅き翼はこの日たった一人の人間によつて事実上壊滅させられた。

第五話 紅き翼の終焉 後編（後書き）

この小説を読んでもいただきありがとうございます。

ラカンはナギが戦っている間、何をしていたかというところ、ラカンは司に攻撃することができないので、ナギとの戦いを見ていました。

今回の話は皆様の感想次第で修正する可能性もあります。なので、出来る限り感想の方をよろしく願います。

これからもこの小説をよろしく願います。

第六話 グレート＝ブリッジ奪還作戦

グレート＝ブリッジ。全長300キロを誇る連合最大の要塞である。しかし帝国の進撃により陥落。

連合軍に決定打を与えたと思われたが、連合はグレート＝ブリッジ奪還作戦を開始した。

史実であれば、この戦いで紅き翼は一躍有名となる戦いであるが、既に紅き翼は壊滅。

決定打のない連合は勝てるのだろうか？

司は今、進撃する連合軍に向かいワルサーで対応する。

司は殲滅系統の攻撃が使えないため、地道に連合軍を削っている。連合には紅き翼のようなバグやチートはもういないため、連合はかなりの苦戦を強いられている。

しかし連合軍の兵士が半分ほどやられた時、戦況が変化する。突如として現れた仮面の集団。

紅き翼と殆ど変わらない実力者達。

司はワルサーで仮面の集団を撃ち落とそうとするが、

「障壁突破 石の槍！」

司の後ろから石の槍が現れる。

司はその直感で石の槍を避ける。

「なるほど。紅き翼を倒しただけのことはある訳だ」

司の前に現れたのは、学生服を着た少年。
その外見とは裏腹にかなりの力を有している。

「君は僕達の計画にとって大きな障害だから、ここで倒してもらおう。
障壁突破 石の槍」

少年が放った石の槍に対して、コンテンドーで迎撃にあたる

コンテンドーに装填されているのは、30106スプリングフィールド弾。ボルトネック構造のライフル用カートリッジで、拳銃弾と比較対象にもならない。
その威力はハンドキャノンクラスのマグナム弾を遥かに凌駕する代物である。

司はそれに攻撃力増加のルーンと強化の魔術を使うことで、更に威力を上げている。

威力が増加されたスプリングフィールド弾は、石の槍を破壊する。

「まさか、僕の魔法を銃で突破されるとは思ってもみなかったよ。
なら、これはどうだい？ヴィシュ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト 小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ その光 我が手に宿し 災いなる 眼差しで射よ 石化の邪眼」

少年の手から放たれる石化の光。

「固有時制御 三倍速」

司は固有時制御を使い、その攻撃を避ける。

「君の魔法。身体強化にしては違和感がある。身体強化よりもかなり上位の魔法。興味は尽きないけど残念だ。僕は君をここで殺さないといけないからね。万象貫く黒杭の円環」

無数の石の針が司に向かい飛んでくる。

司はキャレコで石の針を撃ち落とす。

(こいつ、かなり強い。今の装備で勝てる気がしない)

司は少年の攻撃に対してかなりの危機感を抱いている。ナギのような直線的な攻撃で無く、虚実を使い、その場で効果的な技を使ってくる。

「この魔法も避けるか。なら、千刃黒耀剣」

先程の針と違い、放たれるは無数の石の剣。

それに対して司はRPG7を取り出す。

RPG7。種類はクルップ式無反動砲。

口径は40mm。弾頭は成形炸薬弾。

日本では対戦車ロケット弾と言われており、その威力は戦車を行動不能にさせる程の物である。

RPG-7から放たれた成形炸薬弾頭は石の剣に命中。そのまま爆発し、司に向かって飛んできた剣を全て弾き返した。

(起源弾を除いた中での切り札を使ってしまった。かなり危険な状態だ)

「君の力は本当に素晴らしい。魔法使いが好まない銃火器をあえて使うという。正直言って戦いづらいな」

そう言いながら、少年は詠唱を始める。

その隙を司が逃すはずが無く、司はサバイバルナイフを持って少年に接近する。

「くっ!?!まさか接近戦もできるとは。石の剣」

少年は司に向かって石の剣を振るう。

だが、石の剣はそれなりにでかく、司のナイフと比べると俊敏性に劣る。

司に石の剣が届く前に司のナイフが少年に届く。

「少し油断をしていた。だけど、次はこうはいかないよ」

そう言いながら、詠唱を再開する。
司は今度は拳銃で少年に対して攻撃を行う。
銃弾の雨をたくみに避け続けている。
そしと少年の詠唱が終わり、司は身構える。
だが、ここで少年は予想外の行動に出る。

「ゲート」

少年はゲートを使い、司の後ろに瞬間移動する。
咄嗟の行動に司は反応出来ず、少年の石の槍が左腕をえぐり取る。

「があああああ」

司の左腕が地面に落ちる。
流石の司も余りの痛みに叫んでしまう。

「フフ、これで終わりだ。永久石化」

少年が司に対して永久石化を使う。

「固有時制御 二倍速」

少年が放った永久石化を辛うじて避ける。

(まずい。ただでさえ低かった勝率がさらに下がった。こうなったから逃げることを第一に考えるか)

司は少年を倒す考えを捨て、逃げる算段をたてる。

司は再びコンテナーを取り出す。

そして少年に向かい、引き金を弾く。

少年はスプリングフィールド弾の威力を知っているため障壁に魔力を込める。

スプリングフィールド弾は少年の障壁を貫くことが出来なかった。

司はスプリングフィールド弾が弾かれた瞬間、少年に向かい手榴弾のようなものを投げる。

少年はそれに警戒して障壁の強度を更に上げる。そして手榴弾のようなものが、少年の眼前に来た瞬間、突然、物凄い光と音が発生する。

司が投げたものはスタングレネード。

スタングレネードは殺傷を目的とせず、光と音によって相手の動きを制限するものである。

少年の視界と聴力が戻らない内に左腕を持って離脱。

司は無事逃走に成功した。

「まさか、こんな方法で逃げられるとは。一度帰還するか」

そう言つて少年もその場からいなくなつた。

司は転移に転移を重ね、テオドラと最初に会つた森にいる。

そこで、司はアヴァロンを取り出す。

アヴァロンの力によつて左腕が繋がる。

「今回は完全に俺の敗北だ。とりあえず城に戻るか」

司は城へと向かう。

そして城でグレートブリッジで帝国が敗北したことを知らされる。

第六話 グレートブリッジ奪還作戦（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

今回は原作通り奪還作戦は成功しました。
仮面の集団は完全なる世界の回し者です。
これから先、出て来る予定はありません。

アンケートの結果、アリカはヒロインになりました。アンケートに協力していただきありがとうございます。

今、主人公のアーティファクトが思い浮かばないので、よろしければ何か案を貰えないでしょうか。明日の午後6時まで受け付けさせていただきます。

これからもこの小説をよろしく願います。

第七話 アリカとの出会い

「のう、司」

「どうした？テオ」

テオドラが司に話しかける。

「明日、会談に向かうぞ」

「会談？テオが直接行く程の相手となると、限られてはくるが相手誰だ？」

「司も多分知っておると思うが、ウエスペルタティア王国、その国の王女、アリカ姫じゃ」

ウエスペルタティア王国。連合と帝国。二つの巨大勢力に挟まれ、翻弄されていた王国。

その国の王女、アリカ・アナルキア・エンテオフユシア殿下。彼女は自ら戦争を終わらせようと努力したらしいが、力足りずに終わったとのこと。

「なるほど。確かにそれは行く価値はあるが、何故帝国側に接触し

「ただ？」

帝国はウエスペルティア王国に関しては、不干渉を貫いており、連合の方は積極的に取り入れようとしていたはずだ。

「それは司が帝国におるからじゃよ。司、おぬしがなんて呼ばれているか知らんのか？」

「知らないが」

テオドラは呆れたように溜息をつきながら、司に言う。

「まったく、司は……。司、おぬしは今、魔法使い殺しの異名でかなり有名なのじゃぞ？」

「魔法使い殺し？」

司は切嗣と同じ異名を手に入れていた。

もともと、この世界には魔術師は存在しないので、魔術師の部分が魔法使いになっているが。

「連合最強の紅き翼を一人で、それも魔法ではなく、科学の産物である銃で。帝国でおぬしのことを知らぬ者なぞほとんどおらん」

帝国が手を焼いていた紅き翼を一人で壊滅させた司が有名になるのは必然である。

「とりあえず、その話しを俺にしたと言うことは、俺にその件について頼みでもあるのか？」

「うむ。秘密裏の会談と言えど、情報はどこから漏れでるか分からんからな。司には護衛をやってもらいたいのじゃ」

「ああ、分かった。引き受けるよ。俺は準備をするから、部屋に戻る。じゃあ、また明日」

「また明日なのじゃ」

そう言って司は部屋から出ていった。

「早くするのじゃー！」

「ちょっと待て、テオ！」

今、司はテオドラに引きずられている。

司はテオドラの乗る船に乗らないと言ったからだ。

「テオ、ちょっと落ち着け。それにはもちろん訳があるから」

「どつという訳があるのじゃ」

テオドラはむっとしながら言う。

「俺はテオの船に乗らずにいつて、相手側にはれないように、敵が来ないかを見張る。」

テオは俺の式神と一緒に行って、カモフラージュするんだ」

「なるほどのう。司の狙撃の腕前を考えたら確かに有効な作戦じゃな」

「そついう訳があるんだ。だから、勘弁してくれ」

司は思案顔のテオドラに言う。

「仕方ないのう。じゃあ妾は司の式神と共に会談に行くのじゃ」

少し寂しそうなテオドラを見送り、司も別の船を使い、会談の行われる場所へと向かった。

テオドラは今、会談の会場にいる。

会場は会談をするだけにしては広めの部屋である。

しばらくすると、扉が開かれた。

入ってくるのは長い髪のお金髪でどことなく強気なイメージのある女性だ。

決して豪華ではないが、明らかに姫と思われる服装。間違いなく、会談の相手であろう。

「済まぬ、遅くなった。アリカ・アナルキア・エンテオフユシアじや」

「妾はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじや」

テオドラはアリカに向かい挨拶をする。

テオドラの姿は普段とはまるで違う皇女そのものである。

二人は用意されていた椅子に座り、会談を始める。

テオドラとアリカは難しい顔をしながら、話を進める。

それからしばらくすると、アリカの護衛が動き出す。

「死にたくなければおとなしくしろ！」

アリカはいきなりの行動に動揺し、捕まってしまう。

扉から五人程の男が入ってくる。

テオドラも捕まってしまう。

「へへっ。案外楽な仕事だったな」

「こんなのであんだけ金をくれるなんて、金持ちは違うよな」

「おい、その男。動くなよ。動いたらこいつら殺すからな」

ゲヘゲへと男達が笑いながら言う。

アリカは絶望に満ちた顔をしている。

しかしテオドラの顔に諦めの感情が無かった。

(司が妾を助けてくれると信じておる。だから妾は諦めないのじゃ)

テオドラのそんな気持ちに答えるかの如く、司の式神からおびただしい量の煙が出て来る。

男達は突然のことに戸惑う。

次の瞬間、一人の男の頭が弾け飛ぶ。

そして男の後を追うように、次々と倒れていく。

そしてその場にいた男達が全員死ぬと、誰かが後ろに転移し、アリカとテオドラを連れ、その場から離脱した

「司、信じておったぞ」

テオドラが嬉しそうに言う。

「この者は誰だ？」

アリカは警戒しながら尋ねる。

「ああ、アリカは知らぬのじゃった。司、彼が魔法使い殺しじゃ」

アリカは心底驚いたように、言う。

「まさか、魔法使い殺しだったとは。少しイメージと違うが……………」

司は苦笑しながら、

「一体俺はどんなイメージを受けていたんだ」

「いや…………もう少し筋肉質の男とばかり……………」

司はアリカの言葉にかなり落ち込む。

「そ、それよりどうしてあの煙の中あんな正確に狙い打ちたのじゃ？」

テオドラは話を反らしつつ、疑問だったことを尋ねると、

「ああ、魔法使いが魔法を使う時はな、魔力炉から熱が発生するんだ。煙の中でも熱は見えるから、魔力炉が活発に動いている奴を狙撃したんだ」

「ああ、だから、司は魔力を抑えておけと言ったのじゃな」

テオドラは納得顔で頷く。

「だが、私はそんなことしておらんぞ？」

アリカは当然の疑問をあげる。

「それは、アリカ姫の魔力炉が二つ有ったからです。おそらく王家の魔力と通常の魔力があるからだと思います」

「そうなのか。ところで今、どこに向かっているのだ？」

「今、俺が買っておいた隠れ家に向かっています。もうすぐで着くと思います」

しばらく歩くと、それなりの広さの建物が現れた。

「案外綺麗じゃのう。最悪、掘っ建て小屋を想像していたのじゃが」

「流石にそれをする勇氣はない」

「それでこれからどうするのだ？」

アリカがこれからの行動の指針を聞く。

「とりあえず戦力の増加。敵と判明した奴を倒して、味方と判断した奴を仲間にする。後は装備を整える。武器を揃えないといけないしな。」

後は個人的な事だが、俺の魔術を完成させる必要がある」

テオドラは司の発言にかなり驚く。

「おぬしの魔術、完成しておらんのか」

「ああ、まだ全体の三割ぐらい。完成すれば、固有時制御 二十倍速が使えるし、衛宮本来の魔術が使える。まあ、何とか頑張るよ」

「早めに行動に移そう。私達には時間が無いのだから」

「そうじゃの。司、最初はつらいじゃろうが、頑張っって欲しいのじ

「や
」

「分かったよ
」

こうして三人の戦いが始まる。

司がアリカ、テオドラと共に戦い始めてから半年。ついに最終決戦が始まる。

第七話 アリカとの出会い（後書き）

この小説を読んでいたいただきありがとうございます。

次回からはつい最終決戦が始まります。

読んで頂けると嬉しいです。

また、アンケートで申し訳ないのですが、ネギをTSして、転生者にするか、ネギ、男で妹が転生者のどちらかをお願いします。

ネギTS転生者の方は1

妹がいて妹が転生者の方は2をお願いします。

このような駄文を読んでいたいただきありがとうございます。感想を意見を是非よろしく願います。

これからもこの小説をよろしく願います。

第八話 死闘（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

第八話 死闘

「司殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

司が墓守り人宮殿を見ているところに騎士装甲を纏った女性が現れた。

彼女の名前はセラス。中立武装国アリアドネーのアリアドネー魔法騎士団のリーダーである。

「そうか、ありがとう。君達は召喚魔を抑えてくれ。その隙に俺が特攻する」

「分かりました。司殿！ご健闘を祈ります」

セラスはそう言いながら、立ち去って行く。

その後、司は墓守りの宮殿へと向かう。

しかし、司は気づかなかった。自分の後を追う仮面の集団の存在に。

「やはり君が来たか……………」

少年は納得顔で言う。

「今からでも僕達に付かないかい？」

少年は司を引き込もうと、話を持ち掛ける。
しかし司はそれに答えない。

「だんまりか………残念だよ。君をここで殺すことになるなんて」

そう言いながら、少年は構える。

「障壁突破 石の槍」

少年が石の槍を放つ。だが、それをキャレコで撃ち落とす。

「固有時制御 四倍速」

司は普段のおよそ、四倍の速度で少年に近づく。司はナイフを取り出し、少年に切り付ける。

「くっ！？ 石の剣！」

少年は咄嗟に剣をだす。その剣は前回と違い、細身の振りやすい剣である。

少年はその剣で司のナイフを防ぐ。

「永久石化」

「！？ 固有時制御 五倍速！」

少年が放つ、永久石化をバックステップで避ける。

司はバックステップをしながらキャレコを取り出し、少年に向かい放つ。

しかし銃弾は少年の剣によって切られる。

「千刃黒耀剣」

少年の追撃をキャレコにより撃ち落としながら、コンテNDERを取り出す。

そして、司の十八番の魔術を使う。

「固有時制御 六倍速」

司の体内時間が変化し、加速する。

少年が魔法を咄嗟に中断するも、少年の回避は間に合わない。

しかし少年はここで驚きの行動にでる。

少年は石の剣を取り出し、比較的マイナーである武装強化の魔法を使う。

石の剣は少年から供給される魔力に耐えれず、所々ひびが入ってい

く。

しかし、武装強化に使うにはありえない魔力を帯びた石の剣は、スプリングフィールド弾を捉える。

スプリングフィールド弾は石の剣により、弾道を捻曲げられる。

その光景に少しショックをうけながら、離脱する。

「ぐあつ!?!」

少年からつめき声が聞こえる。

武装強化の魔法により、強化されていたとは言え、スプリングフィールド弾の衝撃はかなりのものである。

「固有時制御 六倍速」

そしてその隙を見逃す司ではない。

司は少年に駆け寄り、コンテナーの銃床をハンマーのように振りかざす。

少年は右腕で防ぐも、強化の魔術に加え、硬い胡桃材の一撃は少年の右腕を砕く。

少年は逆にその隙をつく。

「障壁突破 石の槍」

少年の一撃を司は避けることが出来ず、脇腹にそれを喰らってしま

う。

「があっ!?!」

脇腹に大きな穴が開く。

だが、その傷が治っていく。

少年はその光景を啞然として見ている。

なぜ、司の傷が治っているのか？

それは司の体内に存在するアヴァロンの効果である。少年との戦いの後に体内に入れておいたその効果は治癒である。本来の持ち主でないので、遮断の効果は使えないものの、治癒の効果は十全に働いている。

「……………君は本当に規格外だね」

少年は渾身の一撃を一瞬で治されてしまい、少し落ち込んだように言う。

「これはどうだい?」

少年は手から砂塵攻撃を司に向かい、行う。

司はキャレコで応戦するも 砂塵のため、まったく効果がない。

司は手榴弾を取り出し、砂塵に向かい投げ付ける。

手榴弾の爆風により、砂塵は吹き飛ばされる。爆風により視界が遮

られる。

少年は煙が収まるのを待っているが、司はワルサーを取り出し、スペクターIR熱感知スコープをのぞく。

スコープには少年の姿がはっきり見えており、ワルサーの照準を少年に当て、ワルサーの引き金を弾く。

少年は予想外の狙撃に戸惑い、避けることが出来ずに当たってしまう。

「ここまでとは……………流石に予想外だよ」

少年は顔を苦痛に歪ませながら言う。

そして少年は魔法を使う。

「水妖陣」

司は突如として現れた水の手で足を掴まれ、動きがとれない。

「ここで終わりだ。」

おお 地の底に眠る死者の宮殿よ 我らの下に姿を現せ 冥府の石柱」

少年から放たれる冥府の石柱。

絶対絶命の状況で司はある拳銃を取り出す。

その拳銃の名はファイファー・ツェリザカ・ハンドキャノン。フェ

イファー社により開発された、最強最悪の拳銃。

この世界に存在する拳銃の頂点に立つ拳銃である。その破壊力はラ
イフル弾やスラッグ弾も比較対象にならず、比喩なしで象を殺せる
唯一の拳銃である。

もつともこの拳銃は、その破壊力のため、人間に撃てる限界を超え
た兵器である。

そのため普通は撃てない。

司はその拳銃をルーンにより破壊力を強化、更に、宝石を用いた魔
弾を使うことによりその破壊力を倍増させている。

司は腕に仕込んである十七の宝石と強化の魔術で腕を強化し、冥府
の石柱に向かい放つ。

その一撃は冥府の石柱を撃ち抜き、破壊する。

魔砲と言うに相応しいそれは、撃った反動で壊れる。無茶なルーン
による強化の上、魔弾を使ったため拳銃が耐えられなかったのだ。

採算度外視の一撃により、冥府の石柱が破壊されたのを見て戸惑っ
ている内に、コンテンドーを取り出し、呪文を詠唱する。

「固有時制御 十倍速」

一瞬で少年の前に辿り着いた司は、コンテンドーを少年の心臓に向
かい、撃ち込む。

その瞬間、戦いが終わった。

「まったく、本当に君は予想外の行動をとる」

「黄昏の姫御子は？」

少年は可笑しそうに笑いながら言う。

「フ、フフ。君はまだ僕が黒幕だと思っているのかい？」

「なんだと？」

次の瞬間、司の脇腹が魔法で貫かれる。
まだ、戦いは終わっていない。

第八話 死闘（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。
少し、事情があり更新が遅れました。
本当にすいません。

次回はライフメーカーとの戦いとなります。

感想は今日の昼に返信させてもらいます。

感想や意見、待ってます。

これからもこの小説をよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1265u/>

魔法先生ネギま！ 魔術師殺しに連なる者

2011年6月26日02時12分発行